

分科会 4

学校でこんなこともできる・
している

子ども読書活動交流集会（学校編）

【発表者】

溝口 史江・坪木 悦子・

三枝 静江・藤沢 敦子

（小川町 おはなしサークルピッコロ）

榊 聡美（本庄市立旭小学校）

【司 会】

森田 敏子（吉川市立中曽根小学校）

【助言者】

浅香 都子（浦和子どもの本連絡会）

おはなしサークル ピッコロ

おはなしサークルピッコロは、1999年9月に18名で発足し、主におはなし（素ばなし）を語ることを中心に活動しているサークルです。現在は30代～80代の26名で活動をしています。

図書館主催の「おはなし講座」から生まれたサークルですが、柔軟な幅広い活動をしていきたいため、自主サークルとして活動しています。小川町立図書館のボランティア連絡協議会にも参加し、図書館でのおはなし会や行事には積極的に参加しています。

（小川町立小川小学校での活動）

きっかけは1999年、小川小学校の地域への学校協力人材バンクへの登録の呼びかけでした。保護者でもあった「おはなし講座」の受講生が呼びかけ、サークルを立ち上げ、人材バンクへの登録をしました。そして1999年11月からおはなし会をスタートさせ、当初は1、2学年のクラスで隔月に実施していた「おはなし会」が2002年から全学年に入るようになりました。定期的に全学年に入るようになったのは今年度からです。

毎年、年度初めに学校側との打ち合わせをし、おはなし会ごとに各クラスにプログラムを置いてきます。年度末には年間の活動報告

を渡します。学校行事に招待されるなど学校との交流も深まっています。

（小川町立樺台中学校での活動）

きっかけはある先生の「中学生に読み聞かせをしたらどうかな？」という一言でした。

ピッコロの願いでもあった中学校でのおはなし会の実施は2003年度からはじまりました。2004年度からは年間2～3回、全学年全クラスに朝自習（20分間）の時間に実施しています。

他の中学校での活動も始まろうとしています。

ピッコロのメンバーは現在、ピッコロの枠やおはなしの枠を超えて、町内の全小学校、わらべうたサークルや絵本のサークルなど、地域での活動を広げています。

小川町立図書館の「おはなし講座」を基盤として、広がった活動であり、この講座を企画し、長年継続している図書館に感謝しています。

これからも私たちは「地域の子どもは地域で育てる」という思いで活動をしていきたいと思っています。

発表のはじめに手遊び「はくしゅのうた」に参加者全員で歌ったり、おはなし「三枚のおふだ」「空をもちあげる話」の実演があったりと盛りだくさんで楽しい活動内容の報告でした。「子どもたちを包むまなざしのひとつになれたら」という思いで活動をしているという言葉が印象的でした。



本庄市立旭小学校

－豊かな心を育む読書指導－

旭小学校は埼玉県北部に位置し、田畑が広がるのどかな地域にある児童数378名、教職員数26名の中規模の小学校です。

図書室は北校舎の3階に位置し、子どもたちの教室から離れた場所にあります。

子どもたちの豊かな心を育むために読書が有効なことは、以前からよく言われています。読書活動は子どもたちが言葉を学び、感性を磨き、創造力を豊かにして、心を育み、人生をより深く魅力的なものにするために欠くことができないものです。そこで、一人でも多くの子どもたちがよい本と出会えるようにと、本校で取り組んでいる読書指導を紹介します。

日常の取り組みでは、ボランティアグループや市立図書館の協力をいただいて読み聞かせを行ったり、学級文庫の整備を心がけています。また、国語学習の中で次のような実践をしています。

- ① 「お話列車」(2年生): 列車カードに書名、作者名、登場人物、一番好きなどところや面白いと思うところを書いて、みんなのカードをつないで列車を作り、掲示しています。
- ② 「本の帯作り」(3年生): おもしろかった本、他の人にもすすめたい本に帯をつけて紹介するものです。帯は本につけて、二学期の間「3年生のおすすめの本」コーナーに置いて、貸出しをしています。

図書委員会の活動では、本の貸し出しの他に、雨の日おはなし会を開き、図書委員が紙芝居を読んでいます。上級生と下級生が一緒に本を読むなど交流も見られ、和やかな雰囲気です。

読書月間(11月)の取り組みとしては、次のような実践をしています。

① 「読書朝会」

児童朝会で図書委員の発表を設け、全校児童に読み聞かせを行っています。

② 読書の記録の工夫

読書への意欲を高めるため工夫して読書の記録を書かせています。

・「読書ビンゴ」

ビンゴゲームの数字の代わりに、25マスに書名を書いた用紙を児童に配り、本を読んだら色を塗っていくものです。たて・よこ・ななめがそろくと、図書委員から「しおり」をプレゼントすることになっています。

・「読書貯金」

1ページ1円と換算し、読んだページ数を足して貯金を増やすというものです。本を読めば読むほど貯金が増えるので、自分のがんばりが数字として見え、児童の読書への意欲を高めることができます。

・「読書かるた」

かるたカードに読んだ本の書名を書き、44音の書名を完成させるものです。書名を書くだけにならないように、カードには感想欄を設けました。

子どもたちへの働きかけだけでなく、環境整備も心がけています。図書室が児童の教室から離れているため、足をはこびたくなるように、図書室にソフトマットを敷き、リラックスした雰囲気です。本を読めるようにしたり、魅力的な掲示や本の配架を工夫しています。

様々な取り組みを行うことで児童の読書量を増やし、楽しさを味わわせることができました。活動の長所、短所をふまえた上で、ねらいを持って読書活動指導を行うことが大切だと思います。

現状の中でできる事を精一杯行うことが大事であるという言葉どおりの多様な活動の報告でした。

事例発表後の質疑の時間では、「ボランティアグループが読み聞かせをする時の選書をどうしているか?」「おはなし会をはじめる前に手遊び、わらべうたを導入としていれて

いるか？」 「ボランティアとして図書室や学級文庫との連携をもった活動をしていきたいが、どんな風に進めたらよいか？」などの質問が活発に出され、参加者から他のグループの事例などが紹介され、活発な情報交換の場となりました。

最後に助言者の浅香氏から子どもたちと本をむすびたいという目的はひとつなので、図書館、学校、ボランティアが連携をとりあって、理解しあえる関係になっていくところが大切なのではないかとのおまとめがありました。

